

邪馬台国の時代⑭  
～狗奴国は肥の国～

河村哲夫

狗奴国の所在地

『魏志倭人伝』は、水行十日陸行一月で邪馬台国に至る記事につづけて、次のような記事載せている。

「女王国自(より)以北は、其(その)の戸数・道里、略載(りやくさい)することを得(え)べけれど、其(その)の余(ほか)の旁国(わきのくにぐに)は遠く絶(はな)れて、詳(こ)らかにすることを得(え)ず」

卑弥呼がいた筑紫平野の北側の玄界灘沿岸地域にある末盧国・伊都国・奴国・不弥国の戸数や距離などについての概略は記すことができるが、それ以外のクニグニについては、中国から遠く離れていることもあり、詳細は不明である——と筆者は解している。

伊都国において述べたように、ここでも「女王国より以北」が用いられ、玄界灘諸国の南側——筑紫平野側に邪馬台国があったことが示唆されている。

その後、『魏志倭人伝』は「その余(ほか)の旁国(わきのくにぐに)」の 21 か国について、国名だけを列挙している。

斯馬(しま)国、己百支(いはき)国、伊邪(いや)国、都支(とき)国、弥奴(みな)国  
好古都(をかた)国、不呼(ふこ)国、姐奴(さな)国、対蘇(とす)国、蘇奴(さがな)国  
呼邑(おぎ)国、華奴蘇奴(かなさな)国、鬼(き)国、為吾(いご)国、鬼奴(きな)国  
邪馬(やま)国、躬臣(くじ)国、巴利(はり)国、支惟(きく)国、烏奴(あな)国、奴(な)国

これらのクニグニの読み方も含め、その所在地についても、どういうわけか、ほとんど研究が進んでいない状態である。最後の奴国についても、福岡地域の奴国との重複かどうかについてすら結論が出ていない。

なお、上記の読み方は、安本美典氏の説に従っている。参考までに、安本氏作成による比定地と近畿説による比定地を掲載しておこう。

○九州説による比定地



## ○近畿説による比定地



すでに述べたとおり、太宰府天満宮の『翰苑(かんえん)』によれば、斯馬(しま)国は志摩(糸島市)、伊邪(いや)国は平戸であり、したがって「その余の旁国」21か国は、北部九州地域に所在していた可能性が高いが、この問題についても別の機会に取り上げたいとおもう。

本稿で取り上げるのは、「その余の旁国」21か国の列挙のあとに記された『魏志倭人伝』の記事である。

「此れ女王の境界の尽くる所なり。其の南に狗奴国有り。男子を王と為す。其の官には狗古智卑狗有り。女王に属せず」

と、狗奴国がはじめて登場するのである。

もちろん、この「其の南」については諸説あり、とりわけ近畿説においては邪馬台国の位置を「南」から「東」へ読み替えたこともあり、狗奴国についても「南」を「東」に読み替えて東海地方とする説がトレンドになりつつあるようであるが、詐欺師のように嘘を重ねていけばいつか必ず破綻する。

本稿においては、邪馬台国は筑紫平野のいずれかにあったとみているので、狗奴国は、当然その南方の肥後方面にあったことになる。大正八年(1919)に太宰府天満宮で発見された『翰苑』にも、『魏略』に曰く、女王(国)の南に狗奴国にある」と書かれている。

前号で述べたとおり、『古事記』(伊勢本・道果本)によれば、筑紫国の南には肥国があった。肥国は、熊曾(襲)国でもある。

熊本の「くま」や球磨郡や球磨川などの「くま」とも関係あるのであろう。

そして、『魏志倭人伝』の狗奴(くな)国は、おそらく「くま」という倭人の発音に漢字を充てたものでろう。

さらにいえば、鹿児島県大隅半島北部の曾於郡（そおぐん）は、大隅隼人が支配した襲（そ）に由来する。薩摩半島には薩摩（阿多）隼人がいた。

熊襲とは、厳密にいえば熊（中九州の勢力）と襲（南九州の勢力）のことである。

系統的にみれば、北部九州の人々が4～3.5万年前ごろ朝鮮半島方面から渡来した現世人類の末裔だとすれば、九州中南部方面の熊襲や隼人と呼ばれた人たちは、おなじく4～3.5万年前ごろ南西諸島方面から渡来した現世人類の末裔であったろう。

国名	『古事記』	備考
筑紫国	白日別	邪馬台国ほか
豊国	豊日別	豊の国＝投馬国
肥国	建日別	熊の国＝狗奴国
日向国	豊久士比泥別	もと襲の国＝隼人の国か。 北部九州の勢力が進出(天孫降臨)
大隅・薩摩		襲の国＝隼人の国

つづけて『魏志倭人伝』は「男子を王と為す。其の官には狗古智卑狗（くこちひこ）有り」と記す。

狗奴国は、邪馬台国と異なり、男王制であった。

男王の名は「卑弥弓呼（ひみここ）」と『魏志倭人伝』は記すが、卑弥呼と紛らわしい名であり、中国側の誤記の可能性もある。

「卑弥弓呼（ひみここ）」は「卑弓弥呼（ひこみこ）」の間違いで、「彦御子（ひこみこ）」ないし「彦王（ひこみこ）」とみる説が有力のようである。日本語としても落ち着きを感じられる。

そして、男王を補佐する長官ないし将軍として、「狗古智卑狗」が任命されていた。

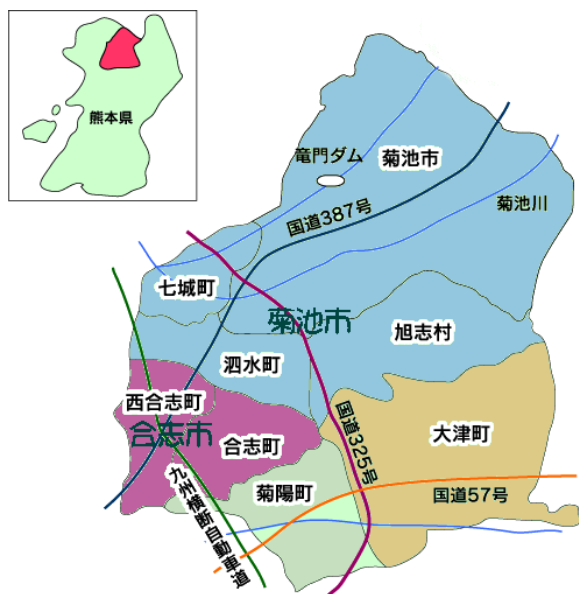
卑狗＝日子＝彦である。邪馬台国もまた対馬・壱岐に「卑狗」を配属していた。

ところが、狗奴国では「狗古智（くこち）＋卑狗」である。卑狗が官職名であるとするれば、狗古智は個人名を表わすのであろう。

「狗古智（くこち）」の発音は、7世紀に築かれた「鞠智（くくち）城」や平安時代に編纂された『和名抄』の「久々知（くくち）」などにも近く、平安時代の『延喜式』には「菊池」と記されているから、これまた713（和銅6）年の「好字二文字化令」によって改められたのであろう。「くこち」＝「くくち」＝「きくち」という関係が成り立つ。

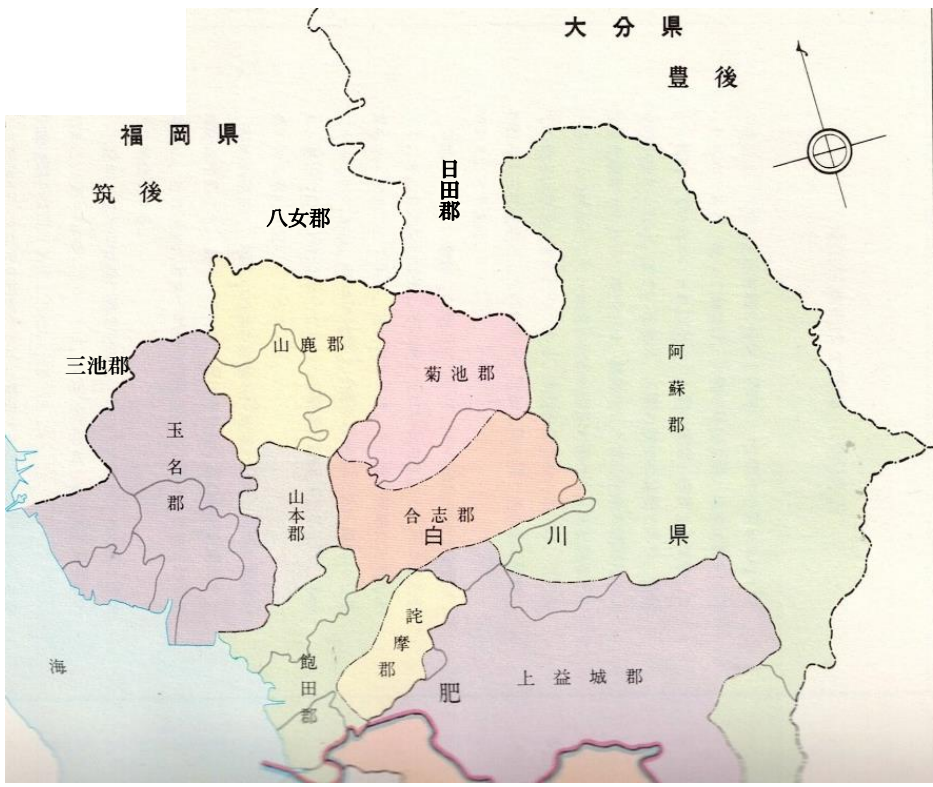
#### 菊池郡の構成市町村

現在	旧市町村	
	菊池市	菊池市（隈府町・竜門村・河原村・花房村・菊池村・戸崎村 水源村・迫間村） 七城町（加茂川村・砦村・清泉村） 旭志村（旭野村・北合志村） 泗水町（吉富村・豊水村・福本村・永村・富納村・住吉村 田島村）
大津町	護川村・陣内村・瀬田村・平真城村・錦野村	
菊陽町	津田村・原水村・白水村・	



菊池郡は北側で豊後国日田郡と境界を接し、菊池川流域の山鹿郡や玉名郡方面で筑後地方と境界を接している。

すでに述べたように、「筑紫=邪馬台国」の勢力、「日田=投馬国」の勢力とみれば、菊池郡・山鹿郡あたりを拠点とした狗奴国は、『魏志倭人伝』のとおり、まさしく邪馬台国連合勢力の南方に位置している。





古代官道図(『日本古代道路事典』八木書店)



## 狗古智の由来

菊池川は東から西に流れている。

阿蘇外輪山の尾ノ岳（1,041メートル）南麓を源に、菊池溪谷を経て菊鹿盆地を西に流れ、和水町北部の狭隘な谷で南へと大きく向きを変え、やがて玉名平野を経て、玉名市南部で有明海に流れ込む一級河川である。

菊池や菊池川名が狗古智卑狗と関係があることはまちがいなからうが、「狗古智(くこち)」の本来の意味がわからない。

「くぼ(窪)」の意で、「低く窪んだ所・谷間」「山中の小平坦地」「山間の湿地」「何かに包まれたような地形」「山間小盆地・谷奥」などとする議論もあるようであるが、天下の長官がじめじめした湿地のような名を名乗るはずはない。

狗古智の由来については、現時点では保留としたほうが無難なようである。

## 熊本県最大級の弥生集落——方保田東原遺跡

全国的にはほとんど知られていないが、菊池川中流域には「方保田東原遺跡」（山鹿市方保田字東原）という熊本県最大級の集落遺跡がある。

菊池川とその支流の方保田川に挟まれた標高 35メートルの台地上に広がる弥生時代後期から古墳時代前期の大集落遺跡である。したがって、邪馬台国時代とも重なる。

方保田は大字名で、「かとうだ」と読む。東原(ひがしばる)は小字名である。原を「ばる」と読むのは、ほぼ九州全域に共通する特徴である。

## 九州における主要な「原(ばる)」

福岡県	飯原(いいばる・糸島市)、平原(ひらばる・糸島市)、前原(まえばる・糸島市)、笹原(ささばる・福岡市)、塩原(しおばる・福岡市)、唐原(とうのはる・福岡市)、檜原(ひばる・福岡市)、女原(みょうばる・福岡市)、屋形原(やかたばる・福岡市)、春日原(かすがばる・春日市)、原(はる・大野城市)、白木原(しらきばる・大野城市)、新原(しんばる・糟屋郡須恵町)、荷原(いないばる・朝倉市)、柿原(かきばる・朝倉市)、黒原(くろばる・北九州市)、陣の原(じんのはる・北九州市)、道原(どうばる・北九州市)、夕原(ゆうばる・北九州市)、茶屋の原(ちややはる・北九州市)、新田原(しんでんばる・行橋市)、九郎原(くろうばる・飯塚市)、柚須原(ゆすばる・田川郡赤村)、塔原(とうのはる・筑紫野市)、柚須原(ゆすばる・筑紫野市)、上原(かみはる・久留米市)、太郎原(だいろばる・久留米市)、郷原(ごうばる・大川市)
佐賀県	中原(なかばる・三養基郡みやき町)、蓑原(みのばる・三養基郡みやき町)
長崎県	礪石原(くれいしばる・島原市)、世知原(せちばる・佐世保市)
熊本県	小原(こばる・玉名郡南関町)、小原(おばる・山鹿市)、久原(くばる・山鹿市)、下河原(しもかわはる・菊池市)、田原坂(たばるざか・熊本市)、西原(にしばる・熊本市)、宮原(みやばる・熊本市)、薄原(すすばる・水俣市)、上原(うわばる・葦北郡芦北町)、岡原(おかはる・球磨郡あさぎり町)、合ノ原(ごうのはる・人吉市)
大分県	秋原(あきばる・日田市)、柏原(かしわばる・竹田市)、城原(きばる・竹田市)、神原(こうばる・竹田市)、拝田原(はいたばる・竹田市)、大原(おおは

	る・豊後大野市)、長者原(ちょうじゃばる・玖珠郡九重町)、北原(きたばる・中津市)、中原(なかはる・宇佐市)、都原(みやこばる・臼杵市)、庄の原(しょうのはる・臼杵市)、乙原(おとばる・別府市)、古賀原(こがのはる・別府市)、机張原(きちょうばる・大分市)、小池原(こいけばる・大分市)、城原(じょうはる・大分市)、杉原(すぎばる・大分市)、旦野原(だんのはる・大分市)、角子原(つのごはる・大分市)、野津原(のつはる・大分市)、日吉原(ひよしばる・大分市)、向原(むかいばる・大分市)、吉野原(よしのはる・大分)、下原(しもばる・杵築市)
宮崎県	西都原(さいとばる・西都市)
鹿児島県	旭原(あさひばる・鹿屋市)、野原(おのばる・鹿屋市)、永小原(ながおばる・鹿屋市)、根木原(ねぎばる・鹿屋市)、西紫原(にしむらさきばる・鹿児島市)、紫原(むらさきばる・鹿児島市)、東原(ひがしばる・始良市)、柊原(くぬぎばる・垂水市)、崎原(さきばる・奄美市)

大字小字を用いて命名された方保田東原遺跡という名は、国指定の史跡でありながら、超ローカルな雰囲気醸し出しており、何度聞いても記憶できない人が多いであろう。

筆者のまわりには、目立たないようにあえてそのような名称にしたのではないのかと疑う人もいるほどであるが、大字小字を使った遺跡名はごく普通のことである。

しかしながら、東方わずか6.5キロの距離にある「鞠智城」が大々的に整備され、県内外からの来場者もかなりあるにも関わらず、方保田東原遺跡はほとんど知られることもなく、しかも埋め戻されて、大遺跡の面影はなく、ひっそりとしている。吉野ヶ里遺跡のような復元遺跡もまったく整備されていない。



せめて、「菊池遺跡」とでも名称変更してほしいところであるが、邪馬台国近畿説の人々からみれば、やはり田舎の遺跡にすぎない。狗奴国を連想させる菊池遺跡という名はもってのほかであるかもしれない。

なお、方保田東原遺跡は、約 11 ヘクタールが国の史跡指定地で、遺跡全体の推定範囲は約 35 ヘクタールという広大な面積である。吉野ヶ里遺跡は、弥生前期 2 ヘクタール、中期 20 ヘクタール超、後期 40 ヘクタールとみられているから、方保田東原遺跡は吉野ヶ里遺跡の全盛期に匹敵する規模といっている。今後の調査によっては、吉野ヶ里遺跡を上回る可能性もあり得よう。

方保田東原遺跡からは、幅 8 メートルの大溝をはじめとする多数の溝や 100 を超える住居跡、土器や鉄器を製作したと考えられる遺構が見つかった。

金属製品の出土が大きな特徴で、全国で唯一の石包丁形鉄器や巴形銅器など数多くの青銅製品や鉄製品なども出土し、出雲系土器や庄内式土器なども出土している。

#### ○山鹿市出土文化財管理センター(山鹿市方保田東原 128)





方保田東原遺跡は、菊池川とその支流の方保田川に挟まれた台地の  
上に広がる集落の跡です。これまで50数回にわたる発掘調査の結果、  
弥生時代の中九州を代表する重要な遺跡で、今から約1900年から  
1700年前の弥生時代後期から古墳時代前期（卑弥呼が邪馬台国を治  
めていた頃）に、大変栄えていたことが分かりました。

昭和60年2月に国の史跡として指定を受け、平成18年7月の追加  
指定で指定面積が約11haに拡大されています。

## 土の中から現れた いにしへの暮らし

国内でも最大級の規模となる幅  
7.8mの大溝をはじめ、多数の住居  
跡のほか、土器や鉄器を製作してい  
た可能性がある跡などが見つかって  
います。当時、大変多くの人々が生  
活し、進んだ技術を持っていたこと  
が分かります。

今後の発掘調査で、方保田東原遺  
跡の特長が、さらに明らかとなっ  
ていくことでしょう。

## 掘り出された 古代の貴重な品々

全国唯一となる石包丁形鉄器をは  
じめ、特殊な祭器とされる巴形銅器  
や鏡、当時の中国の皇帝も珍重して  
いた朱を精製する道具など、全国で  
もあまり見られない貴重な品々が見  
つかっています。

これらのうち、28種139点が熊  
本県重要文化財に指定されています。  
(平成20年6月23日指定 考古第  
13号)



## 方保田東原遺跡出土品

重要文化財方保田東原遺跡出土品は、これまでの発掘調査で出土した遺物の中から主なものの計952点から構成されます。これらの中で特に注目されるのは、多数の鉄器及び鉄器製作関連遺物と、赤色顔料調製に関する遺物です。このほか豊富な青銅器や土器、土製品などがあります。日本の多様な弥生文化の一つのあり方を示すものとして、学術的価値が高い資料と評価を受け、平成29年9月15日に重要文化財に指定されました。

〔土器・土製品429点、金属製品371点、石器・石製品54点、貝輪2点、ガラス玉96点(総計952点)〕



家形土器

屋根と脚台を欠いていますが、当時の高床式建物を模した土器です。大きさは現存で、長さ22.4cm、幅20.0cm、高さ17.2cmです。壁と床がほぼ残り、一部ベンガラが付着しています。

### 赤色顔料調製関連資料

赤色顔料調製に関する資料としては、顔料の付着した石片と敲石などと、土器(赤色顔料付着土器)があります。朱(水銀朱)やベンガラ(酸化鉄)の調製に使用された道具と考えられます。

石片・敲石  
(右下:棒状石片  
長16.7cm)



弥生時代後期後半の土器  
(左下:器台 高17.3cm)



石包丁形鉄器

土器

弥生時代後期から古墳時代前期に使用された土器が大量に見つかっています。そのうち、状態の良い資料、他地域の影響を受けた資料、類例の少ない資料が指定されています。



古墳時代初頭から  
前期ごろの土器  
(中央下:器台 高8.0cm)



青銅器  
(左上:巴形銅器  
直径12.3cm)

## 鉄器

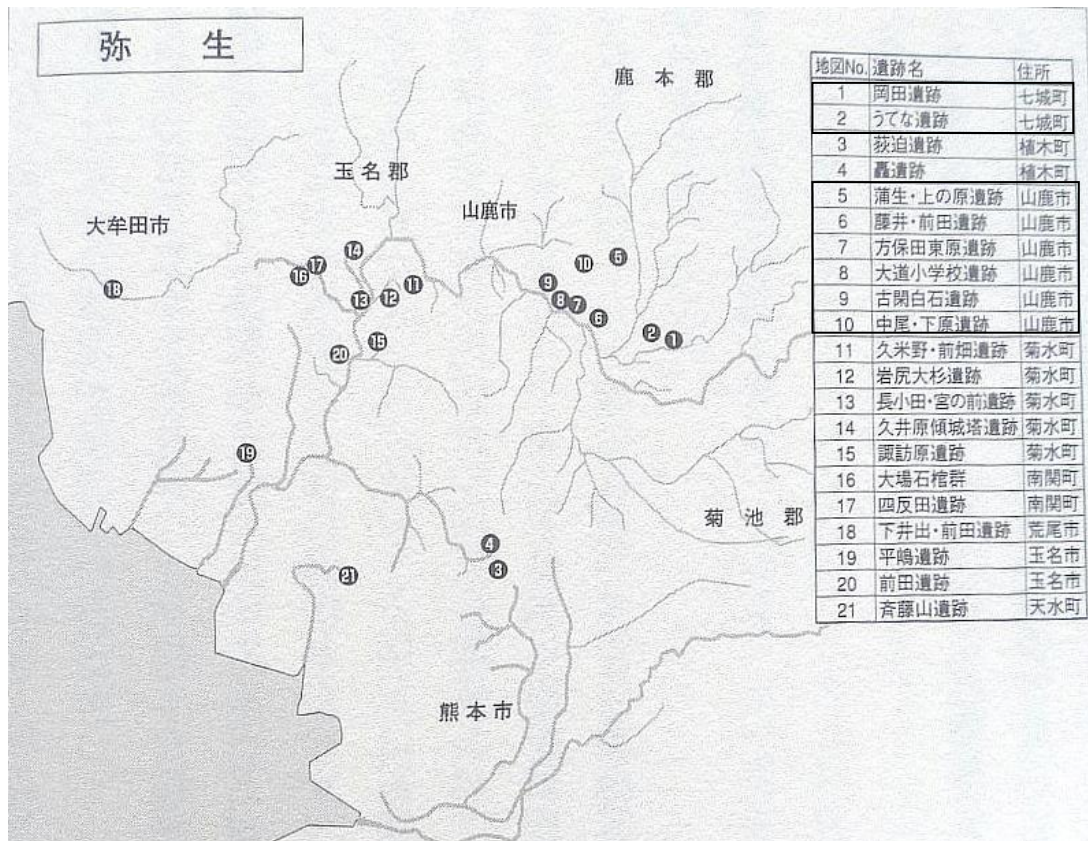
鉄器には、石沓丁形鉄器、鎌、穂摘具などの農具、さらに斧、鑿、鉋などの工具のほか、鎌、剣、釣針などがあり、当時の鉄器の組み合わせが一通り揃います。このことは当集落において道具の鉄器化がかなり進んでいることを示します。



石沓丁形鉄器(長11.7cm)  
石沓丁形鉄器は、現在のところ  
当遺跡だけで出土している希少な資料です。



鉄器  
(右上:鎌 長18.5cm)



菊池川流域の弥生時代遺跡(『遺跡が語るくまもとの歩み』熊本文化財保護協会)

## 菊池川流域の遺跡群

このように方保田東原遺跡は、狗奴国拠点の最有力候補とみているが、もともと菊池川中流域は弥生時代の環濠集落の密集度の高い地域である。

方保田東原遺跡の西側には桜町遺跡や古閑白石遺跡(9) 大道小学校遺跡(8)などがあり、東側の上内田川右岸の丘陵地には蒲生・上の原遺跡(5)と津袋大塚遺跡というの2つの環濠集落がわずか600メートル間隔で並んでいる。

中尾・下原遺跡(10)からは弥生前期の板付式土器が出土しており、奴国(福岡)方面からきわめて早い段階で稲作が伝搬していたことが明らかになっている。



文化的に言えば、北から南へ向かうベクトルが強く、肥後南部の熊本県の宇土半島あたりまでは多少なりとも北部九州の影響を受けていた圏域であったといえよう。

なお、方保田東原遺跡あたりで合志川が菊池川に合流している。



合志川も菊池川とおなじく阿蘇外輪山を源に西流し、熊本市北区・菊池市・合志市の3市境界付近で北に向きを変えて菊池川に流れ込む。

ということは、合志川は熊本—合志—菊池をつなぐ水運機能も有していることになる。そして、菊池川を通じて有明海ともつながっている。

逆にいえば、有明海から菊池川を攻め上ってくれば、肥後北部を制圧することができる。

これが、内陸部の深い場所でありながら、唐と新羅の侵攻に備えて鞠智城を造った理由である。

なお、合志川中流域左岸にも、石立遺跡(合志市)、八反畑遺跡(合志市)、藤巻遺跡(菊池市)などの環濠集落遺跡が確認されている(杉井健 2018)。

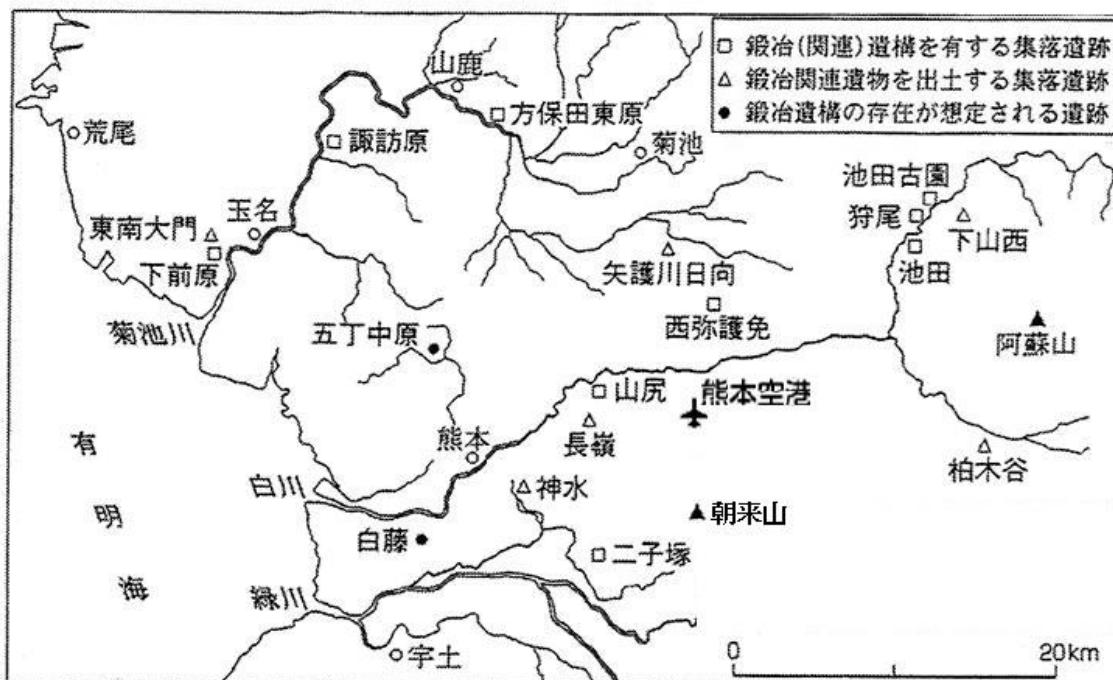
狗奴国は方保田東原遺跡という大集落を中心に、多くの集落ないしくニと広域連携しながら、北部九州の勢力と対峙していた状況が浮かび上がってくる。

### 鉄器の製造

狗奴国の原動力の一つに、鉄器の製造能力がある。

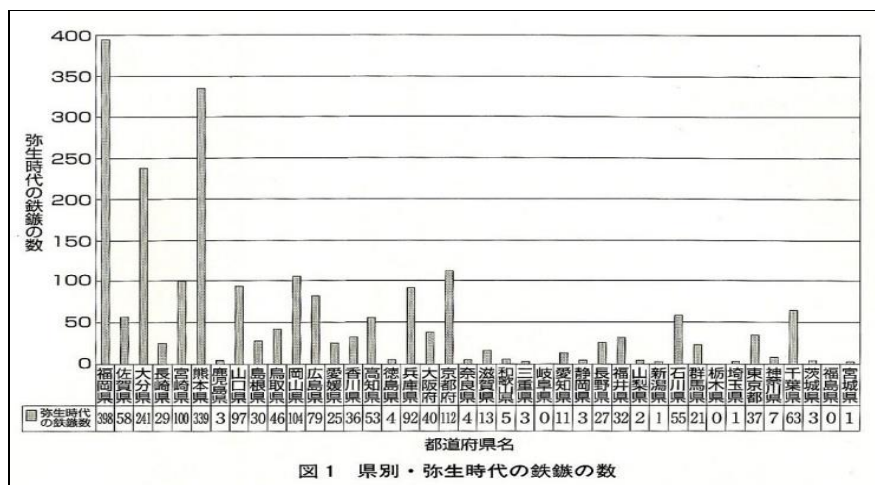
特に阿蘇方面から菊池川・白川流域にかけて、多くの鉄器や鉄滓、鍛冶遺跡が出土している。しかも弥生後期の遺跡に多い。邪馬台国と覇を競った時代と重なる。

狗奴国の拠点とみられる方保田東原遺跡からも、全国で唯一の石包丁形鉄器はじめ、鍛冶遺跡、鉄滓なども出土しており、集落内で製造していたことが確認されている。



弥生時代後期後半におけるおもな鍛冶遺構の分布(『熊本県の歴史』)

しかも、阿蘇地域から大分県側——豊後の大野川流域まで広がっている(村上恭通 2007)。  
先に紹介した安本美典氏の各県別の鉄器の数のうち、鉄鏃(鉄の矢じり)の数をみれば、  
熊本県はトップの福岡県に迫る勢いである。大分県からの出土数も多い。



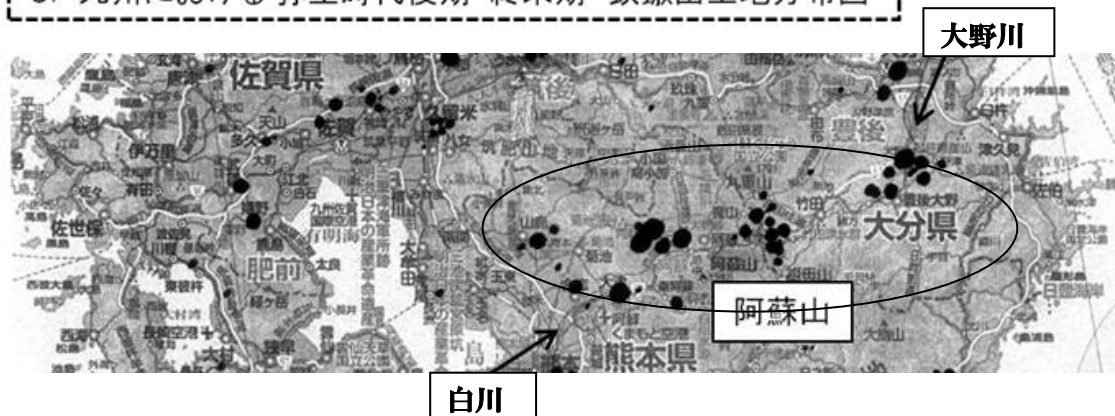
表Z42 弥生時代・武器類鉄器・出土件数ベスト20  
「弥生時代鉄器総覧」川越哲志氏 2000年作成を集約

遺跡名	場所	武器類件数	全鉄器件数	遺構件数
西弥護免遺跡	熊本県菊池郡大津町	133	567	108
川床遺跡	宮崎県児湯郡新富町	80	90	82
狩尾湯ノ口遺跡	熊本県阿蘇郡阿蘇町	61	339	37
池田・古園遺跡	熊本県阿蘇郡阿蘇町	58	160	25
徳永川ノ上遺跡	福岡県京都郡豊津町	50	65	43
高添遺跡	大分県大野郡千歳村	43	91	30
方保田東原遺跡	熊本県山鹿市	40	141	26
下山西遺跡	熊本県阿蘇郡阿蘇町	32	63	21
三雲遺跡	福岡県前原市	30	88	45
貝元遺跡	福岡県筑紫野市	29	91	62
汐井掛遺跡	福岡県鞍手郡若宮町	27	42	28
守岡遺跡	大分県大分市	25	34	13
下郡遺跡	大分県大分市	23	28	14
高津尾遺跡	北九州市小倉南区	21	46	33
高松遺跡	大分県大野郡犬飼町	20	47	15
二子塚遺跡	熊本県上益城郡嘉島町	19	37	29
小園遺跡	大分県竹田市	19	34	19
上菅生B遺跡	大分県竹田市	18	31	25
二本木遺跡	大分県大野郡大野町	18	34	17
野中中原遺跡	福岡県福岡市西区	18	41	17
計		807	2069	689

上表のとおり、遺跡ごとの鉄製の武器類の出土件数をみても、上位にはずらりと熊本県勢がなっている。

しかも、下図のとおり、邪馬台国と狗奴国の緊張関係を反映するかのよう、阿蘇郡・菊池郡・山鹿郡・玉名郡と豊後および筑後と境界を接した山間部の遺跡から多くの鉄鏃が出土している。

C. 九州における弥生時代後期・終末期 鉄鏃出土地分布図



(川越哲志編『弥生時代鉄器総覧』(2000年刊)を再集計し、谷本作図2018年10月)

ちなみに、「ベスト 20」に入った熊本県の弥生遺跡の概要は次のとおりである。

遺跡名	場 所	概 要
西弥護免遺跡	菊池郡大津町	阿蘇外輪山西麓の標高約 160 メートルの台地上にある弥生後期の環濠集落遺跡。多量の鉄器。居住区の東側と西側に墓地があり、居住区は楕円形の環濠をめぐらし、墓地はその外側の東側と西側に存在する。土壌墓と木棺墓で別地点に弥生前期中期のカメ棺 11 基が出土している。
狩尾湯ノ口遺跡	阿蘇市阿蘇町	狩尾遺跡群の一つ。阿蘇外輪山北西麓の狩尾遺跡群に属する。弥生後期の鉄生産が最盛期を迎えたころの集落遺跡。近くにはリモナイト(褐鉄鉱)を産する明神山鉱山あり。
池田・古園遺跡	阿蘇郡阿蘇町	同上
方保田・東原遺跡	山鹿市方保田	菊池川中流域の標高 35mの台地上に所在する弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡。多数の土器のほか、鉄鏃・刀子・手鎌・鉄斧などの鉄製品や巴形銅器・銅鏃・小型仿製鏡などの銅製品が出土(前述のとおり)。
下山西遺跡	阿蘇郡阿蘇町	阿蘇カルデラの中央部に位置する集落遺跡。34 軒の住居跡、4 基の石棺、ガラス製勾玉、小型仿製鏡、鉄器 163 点など。 中期以前の輝石角閃石安山岩の石斧 1 個や数個の石包丁が出土しており、北部九州(筑豊地区)との交易が想定されている(熊本県文化財報告書 88)。
二子塚遺跡	上益城郡嘉島町	弥生時代後期の鉄製品は、素環頭短剣、小型短剣、鉄鏃などの武器、大小の袋状斧、鉞、刀子、棒状鉄器などの工具、鋤先、摘鎌、曲刃 鎌などの農具からなる。ほぼ完全に鉄器化している。



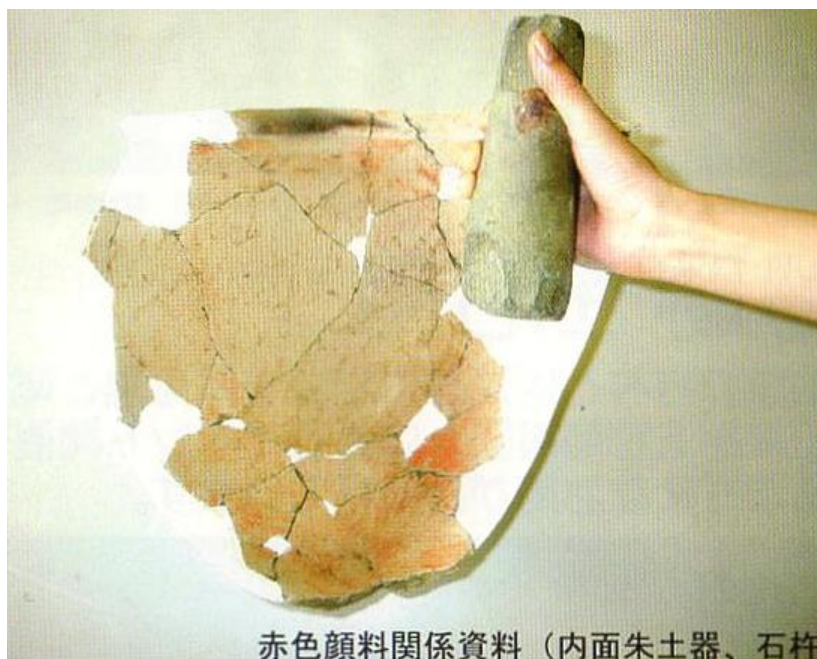
このうち、狩尾遺跡群(湯ノ口遺跡、方無田遺跡、前田遺跡、古園遺跡)については、季刊「古代史ネット」第6号(2022年3月)に掲載された塩田泰弘氏の「倭人伝を考える——鉄について——」に詳しく述べられているので、それを参照願いたい。

塩田氏は丹念に文献を読み込み、そのなかで、「熊本県文化財調査報告131号」の「(狩尾遺跡群)鉄製品の出土状況はほとんど使い捨てであり、破損品を補修あるいは回収していない。これは生産地ならではの鉄製品の消費状況であるが、仮に舶載品である鉄素材にすれば、あまりに浪費的な消費にすぎ、また、陸揚げ地点からもかなりの遠隔の山間地で地金を鉄製品に加工する必然性は乏しい。こうした困難は、ただひとつ地金は舶載品ではなく在地での製鉄からなされたとして氷解するものであるがこの解明は今後の課題である」を引用され、「下扇原遺跡、狩尾遺跡群がある阿蘇カルデラは、リモナイト(褐鉄鉱)の大きな埋蔵地があり、・・・鉄の原料には事欠かない」とまとめられている。

つまり、阿蘇や菊池川流域などにおける鉄器の生産は、朝鮮半島などから輸入された鉄の原材料——インゴットなどではなく、阿蘇山のリモナイト(褐鉄鉱)——阿蘇黄土からつくられた鉄を原材料として鉄器がつけられたとみておられる。

阿蘇黄土を焼けば、簡単に赤いベンガラになる。「阿蘇黄土をフライパンに入れ、ガスコンロで熱すると、2分ほどで黄土色が黒になり、冷ますと今度は濃い赤に変色した。鉄分が発色するという」という(朝日デジタル・2002年12月10日)。

ベンガラは魔除けの赤色として古代人に珍重され、カメ棺や石棺の内部を赤く塗ったり、建物などを赤く塗る顔料として使われた。



赤色顔料関係資料(内面朱土器、石柱)

方保田東原遺跡



方保田東原遺跡

### ベンガラ鉄

もちろん「阿蘇黄土」（褐鉄鉱）は酸化第二鉄であるから、現代の技術では簡単に鉄をつくることができよう。しかしながら、このいわゆる「ベンガラ鉄」を肥後の古代人がどのようにして製造したのか、具体的な作業工程はわかっていない。

広島大学教授野島永氏の「弥生時代の鉄器保有の一様相」にも、

「阿蘇山麓周辺の弥生時代後期の大規模集落には、多量の鉄器・鉄片とともに鉄滓が頻繁にみられる。このため、当該地域では鉄器だけではなくその原料素材さえも生産していた可能性が指摘されている。九州北部に素材を頼らずに地域内で成品を加工した可能性もありえよう」

と書かれている程度である。

砂鉄からつくるタタラ製鉄は伝統的技法として現代まで継承されているが、肥後の鉄器製造は、どういうわけか古墳時代になると一挙に衰退し、やがて断絶してしまったため、いわゆる「ベンガラ鉄」の存在すら疑われている。

しかしながら、先に紹介した「熊本県文化財調査報告 131 号」の鉄製品に関して「ほとんど使い捨て」「破損品を回収せず」「生産地ならではあまりに浪費的な消費」「地金は舶載品ではなく在地での製鉄」などをつなぎ合わせて考えれば、無尽蔵ともいえる「阿蘇黄土」（褐鉄鉱）から鉄をつくり、さまざまな鉄器を製造した技術者集団が阿蘇・菊池川・白川流域に存在していたことは明らかである。

これこそが、邪馬台国に対抗した狗奴国の力の源泉であったというべきであろう。

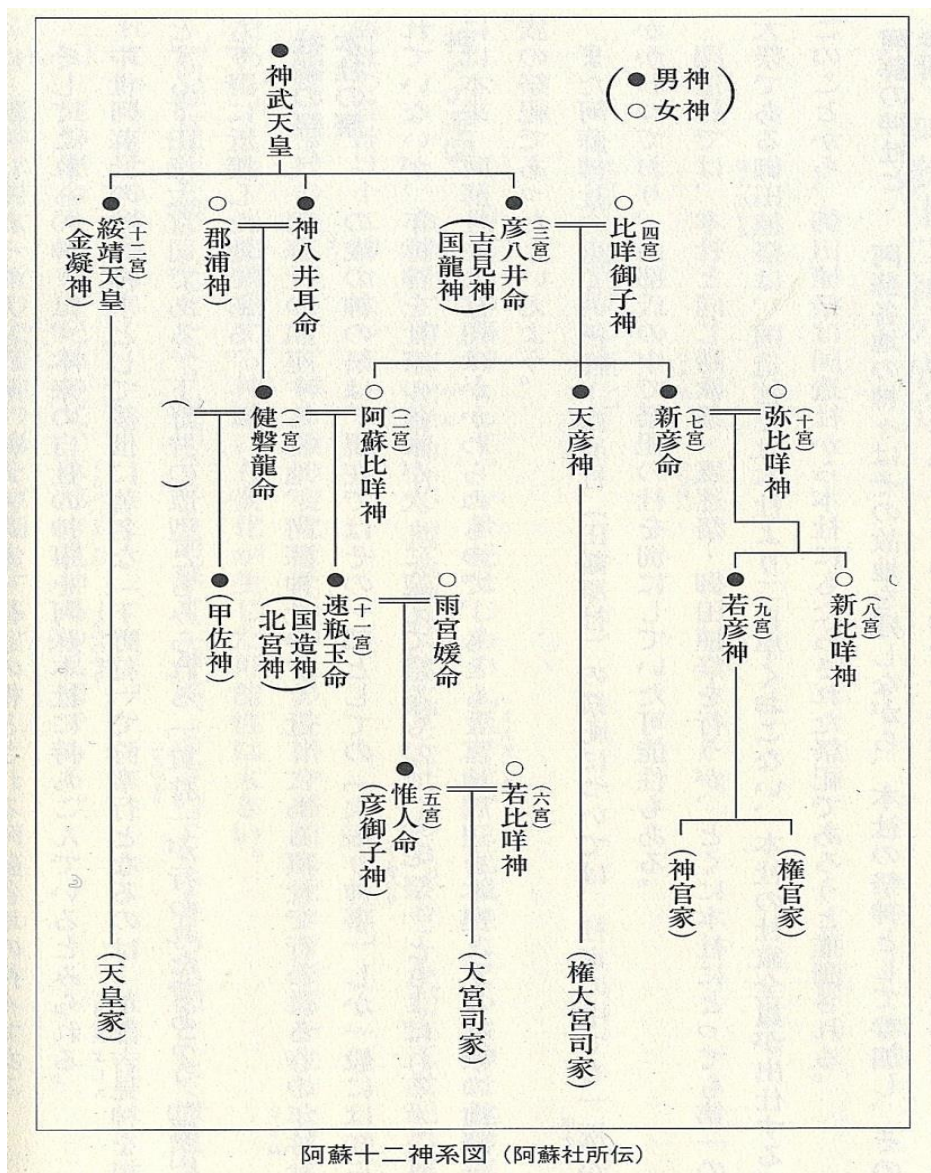
## 金凝神について

ベンガラは日本固有の名称ではない。江戸時代にインドのベンガル地方産を輸入したために「ベンガラ」と名づけられといひ、「弁殻」や「紅殻」という漢字が充てられた。

ベンガラの日本固有の名称はなかったのであろうか。しかしながら、阿蘇地方で大量に生産された古代のベンガラおよび鉄をあらわす固有の名詞がなかったはずはない。

あれこれ調べているうちに、金凝(かなこり)にたどり着いた。

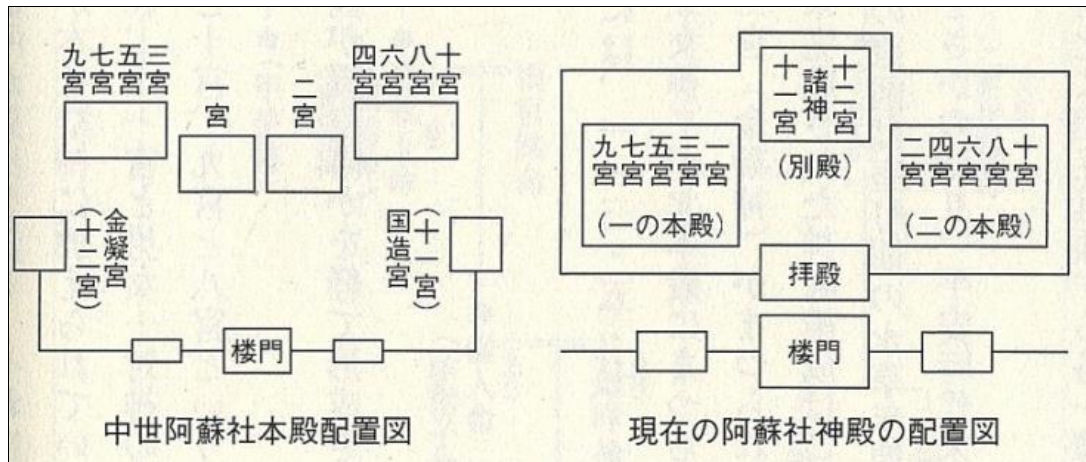
金凝神として、阿蘇神社に祭られている。



一宮には神武天皇の孫とされる建磐龍命、二宮にはその妻の阿蘇都比咩、三宮には神武天皇の皇子の彦八井命(国龍神)、四宮にはその妻の比咩御子神が祭られ、以下その子孫が11宮まで祭られている。

崇神天皇の時代、諏訪方面から阿蘇に赴任してきた建磐龍命がこの地方を開拓したとい

う伝承に基づいている。したがって、いずれも神武天皇以降の系譜となっている。



ところが、十二宮の金凝神が第二代綏靖天皇に充てられている。

中世の阿蘇神社の本殿配置図では、中央に一宮と二宮が祭られ、側面に三宮～九宮の男神と四宮～十宮の女神が祭られている。そして、阿蘇地方の国造に任じられた速瓶玉命が十一宮として祭られ、それと並列的に同格の神として十二宮に祭られているのが金凝神である。

金凝神が第二代綏靖天皇だとするとおかしな配置である。天皇は最も上位に置かれるべきであろう。

そのことを踏まえてか、現在では正面に祭られている。しかしながら、中世の配置が本来の配置であるとする、金凝神＝綏靖天皇とするには疑問がある。

肥後に繁栄をもたらすベンガラや鉄が神として祭られたのが金凝神で、神武天皇以前にさかのぼる阿蘇神社の本来の祭神であったのではないか。

その金凝神を第2代綏靖天皇とするのは、後世における阿蘇氏の朝廷対策の一環か、あるいは阿蘇神社の権威を高めるための操作としかおもえない。

### 金凝(かなこり)の意味

- 「かね・かな」は鉱物の総称で、「金」という漢字が充てられた(金属・金物など)。
- 「こり」には「こりかたまる」というような意味で「凝」という漢字が充てられた。
- 「くり・ぐり」ともいい、「栗石(くりいし・ぐりいし)」といえは栗の実ぐらいの小石をさす。
- 岩石はその大小にかかわらず「いし」といい、特に大きな岩石のことを「いは(わ)」という(白川静『字訓』平凡社)。
- 天照大神の天の岩戸隠れの際に、祭祀が行われたが、八咫鏡をつくったのは、イシコリドメ(トベ)であった。『古事記』では伊斯許理度売(ドメ)命、『日本書紀』では石凝姥

(ドメ)命または石凝戸辺(トベ)命と書かれる。



イシ(石)・コリ(凝)・ドメ(トベ=年長の女性)と解釈できるが、青銅の鏡をつくったのに「カナ(金)・コリ(凝)」ではなく、「イシ(石)・コリ(凝)」とは一体何ごとぞ。

おそらく、古代日本においては、イシ(石)もカナ(金)も区別なく「イシ(石)」と呼んでいたのであろう。

ところが、阿蘇を中心とした地域では、黄土からベンガラ、さらに鉄をつくりだす技法が発明され、できあがった小さな鉄の塊を「カナ(金)・コリ(凝)」と呼び始めた——というのが筆者の推測である。

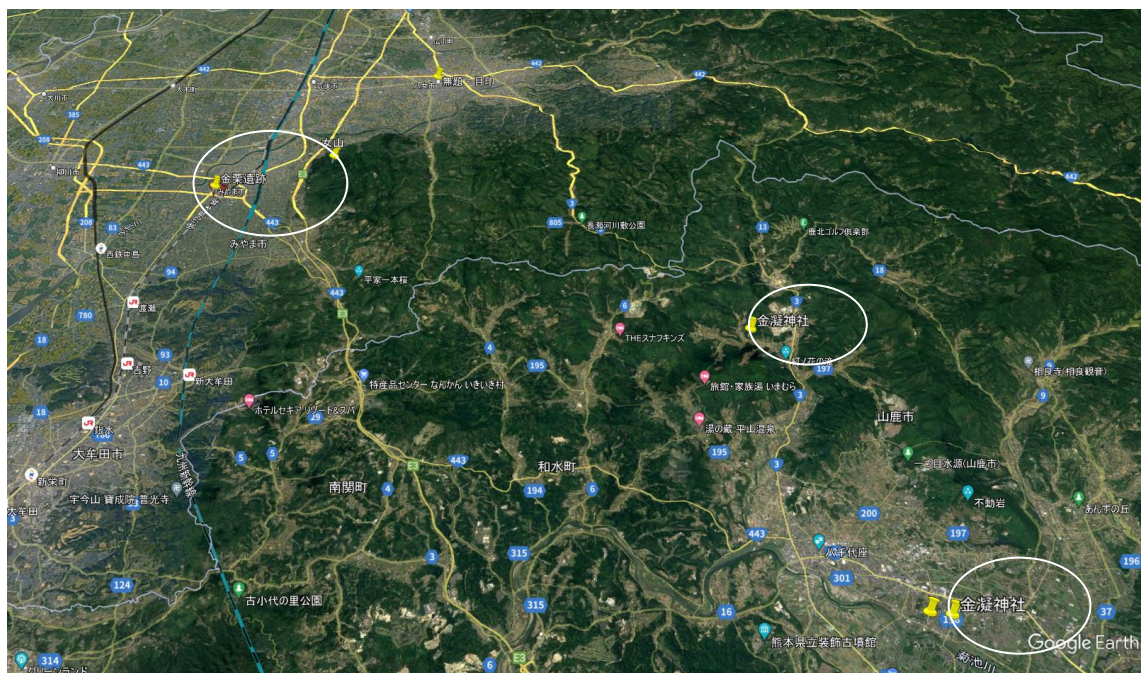
弥生人は、米の収穫を喜び祝った。貴重な稲穂を収納する倉が神々を祭る神聖なる「穂倉(ほ・くら)=祠(ほ・こら)」になったように、阿蘇黄土からつくられた金凝(ベンガラと鉄)は「金凝神」として祭られた。

### 金凝神社

鉄器を製造した方保田東原遺跡の一角と思える場所にも、金凝神社(山鹿市方保田)が祭られている。



また、筑後地方に近い山鹿市鹿北(きくしか)町芋生(いもう)にも、金凝神社が祭られている。



なお、日田郡にも金凝神社(日田市天瀬町五馬市)が祭られている。



このあたりにも、阿蘇とおなじく黄土の鉱床があるといい、阿蘇方面との交流のなかで、黄土からベンガラと鉄を製造していたかもしれない。

### 金栗遺跡

さらには、筑後地方のみやま市瀬高町小川の字「金栗」には、「金栗遺跡」がある。

金栗といえば、金栗四三(かなぐりしろう・1891~1983)のことが想起されよう。日本マラソン界の発展に大きく寄与した人物である。菊池川流域の玉名郡春富村(和水町)で生まれ育ったが、先祖は山鹿出身である。江戸時代の金栗頼助(せすけ)が名字帯刀を許され、金栗姓を正式に名乗ったという。ちなみに金栗頼助は山鹿に水路を築いて村の礎を作ったと評されているから、土木建築に長けた人物であったのだろう。

この経緯からみても、金栗は金凝に由来している可能性が高い。

「金栗遺跡」は、昭和25年(1950)瀬高中学グラウンド拡張のための土を得るため、近くの金栗の水田を掘ったところ見つかった。

弥生中期からつづいた東西40m・南北30mの区画の環濠集落跡で、古墳時代後期から鎌倉時代前期の遺構も出土し、削り貫いた木を柱として使用した奈良時代の井戸1基もほぼ完全な形で発見された。



集落内には井戸6基、炉址3ヶ所、灰のつまった竪穴4ヶ所、平安時代の竪穴住居跡16戸が確認された。

環溝内からは奈良時代の釜戸（九大資料室に復元品あり）、瓦、土師器、須恵器や平安時代末～鎌倉時代初期頃の宋青磁なども出土している。

金栗という地名からみて、この遺跡はもともと鍛冶遺跡で、肥後からやってきた渡り職人たちがこの場所を拠点に、地元の注文に応じて、鎌や包丁などの鉄製品を製造していたのであろう。

矢部川下流左岸の平野部に位置し、有明海の海岸線から10キロの内陸部にあるが、縄文時代には有明海がこの近くまで湾入していた。

弥生時代には海岸線が後退し、このあたり一帯に島々が形成された。

金栗もその島の一つである。この島を肥後の鉄器職人たちが拠点にした。

島を拠点にすれば、安全性の面からいっても利点大きい。



ちなみに、上図で山門と付されている場所が山門郡の中心地である。

右手の女山(ぞやま)は神籠石で有名である。

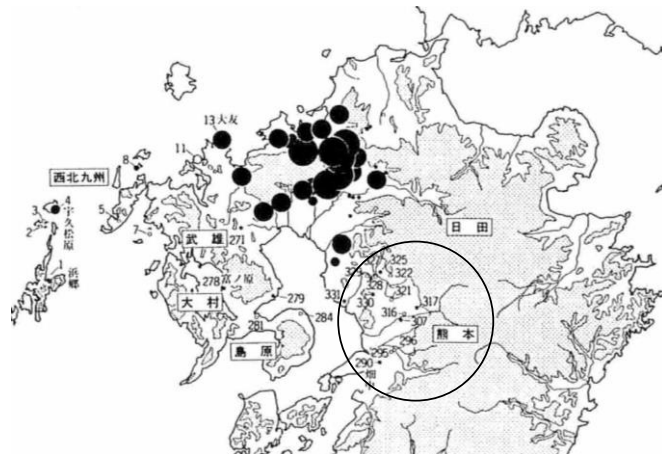
この山門は、明治になって邪馬台国論争の始まりを告げる、いわば「邪馬台国山門説の聖地」ともいえる場所である。

筆者がよく知っている場所でもあるため、超ローカルで、超マニアチックな記事になってしまったかもしれない。

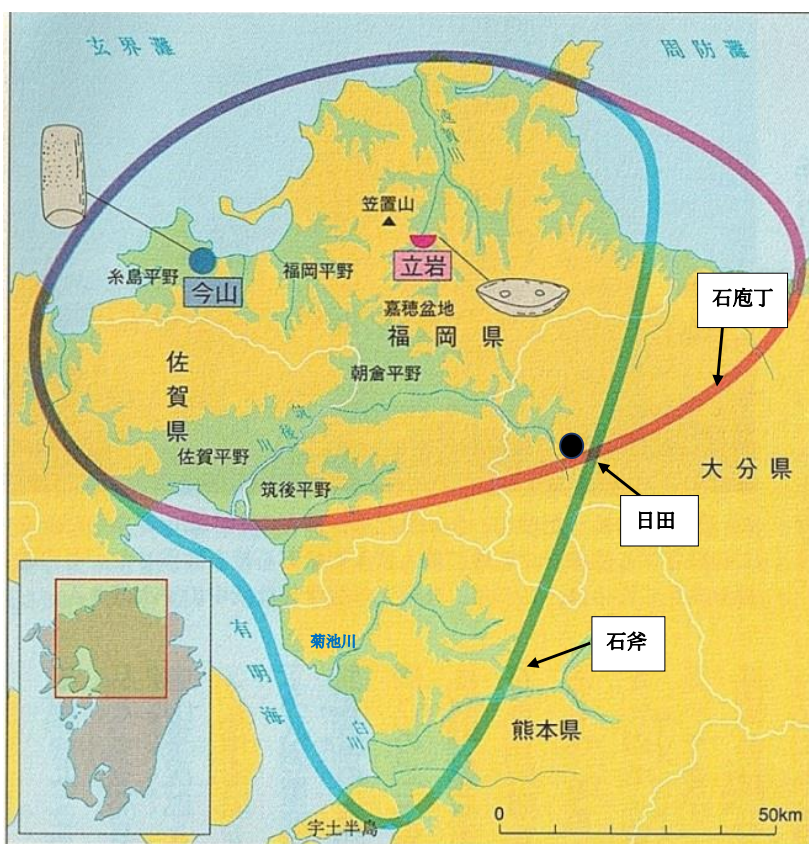


### カメ棺文化圏

かつてこの連載で述べたように、北部九州において、紀元前2世紀から紀元後170年ごろまでは、「奴国の時代」であった。その特徴は、カメ棺であり、そのなかに鏡・玉・剣を埋納する習慣を生じた。この北部九州の奴国の墓制は、中九州の菊池川流域から宇土半島のつけ根あたりまで、広く薄く分布している。



菊池川流域の中尾・下原遺跡においては、稲作開始時期の板付式土器も出土し、福岡市西区の今山遺跡産の石斧や飯塚市の立岩遺跡産の石庖丁も広く分布している。



田中 琢著『倭人争乱』(1991 集英社)

菊池郡大津町の西弥護免遺跡からは弥生前期と中期のカメ棺 11 基が出土している。  
奴国を盟主とした圏域のなかに、菊池川流域のクニグニも包含されていたのではないのかという思いすら生じる。

狗奴国の王もまた奴国によって選任された王の系譜なのではないか――。

奴国の時代、北部九州と中部九州はわりと穏やかで、平和的な関係が長くつづいていたのではないか。

ところが、盟主たる奴国が、新興の邪馬台国によって覇権を奪われてしまった。

狗奴国はその邪馬台国と北で境界を接している。しかも、邪馬台国は拡張政策をとっている。壱岐・対馬を抑え、五島列島方面にも進出し、筑後と豊後方面から狗奴国にも圧力をかけてきた。

### 邪馬台国と狗奴国の戦い

邪馬台国の拡張政策に反発する形で、狗奴国は武力による反撃を開始した。

『魏志倭人伝』には、

「其の八年、太守王頌、官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素(もと)より和せず。倭の載斯・烏越等を遣わして(帯方)郡に詣(いた)り、相(あい)攻撃する状(さま)を説く。塞の曹掾史張政等を遣わし、因りて詔書・黄幢を齎(もたら)し、難升米に拝(ま)せしめ、檄(げき)を為(つ)くりて、之に告諭(こくゆ)せしむ」

とある。

「正始八年(247年)、帯方郡太守の王頌(おうき)が着任した。倭の女王卑弥呼と狗奴国の男王卑弥弓呼は、以前より仲が悪かった。卑弥呼は倭の載斯(さし)・烏越(あお)らを帯方郡に遣わし、互いに攻撃していることを報告させた。そこで帯方郡の塞(さい)の曹掾史(そうえんし)・砦(せ)の部隊長(し)の張政(ちやうせい)らを倭に派遣し、詔書(しょうしょ)・皇帝の詔(し)と黄幢(こうどう)・軍旗(ぐんし)を難升米(なしめ)に与え、檄(げき)文(ぶん)を發して諭(さと)した」

という意味である。

(以下、つづく)